

現代編(戦後)

84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68
須田彦	鈴木友吉	勝呂一	坂西多三郎	小林好三郎	川崎辰太郎	小川与之助	小川弥次郎	小川大三	大塚教識	馬橋浜十	伊利信義	犬竹正雄	石川平四郎	荒井次郎	新井今朝太郎	浅見敏
(社会教育家)	(馬車会社経営)	(教育者)	(料亭経営)	(教育者)	(警察官)	(教育者)	(勝呂村長)	(県議会議員)	(県議会議員)	(坂戸町長)	(医師)	(医師)	(彫刻家)	(渡し場管理)	(あめ細工)	(坂戸町長)
大家…	坂戸…	勝呂…	坂戸…	坂戸…	坂戸…	勝呂…	勝呂…	入西…	勝呂…	坂戸…	入西…	大家…	坂戸…	勝呂…	三芳野…	入西…
180	178	176	174	172	170	168	166	164	162	160	158	156	154	152	150	148

あとがき

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85
吉川与一	武藤弘之	水村喜治	松本政平	町田辰紀	町田亀蔵	増村石男	保積稻天	細野喜代松	平田芳太郎	林 織善	富沢寛介	田中弥市	田中四郎	田中朝三	高橋勝次
(大家村長)	(画家)	(民俗芸能伝承)	(町議会議員)	(大家村長)	(勝呂村長)	(俳人)	(画家)	(教育者)	(産業功労者)	(勝呂村長)	(入西村長)	(在郷軍人会)	(坂戸町長)	(海軍軍医)	(社会教育家)
大家…	勝呂…	勝呂…	坂戸…	大家…	勝呂…	大家…	入西…	入西…	入西…	勝呂…	入西…	大家…	坂戸…	大家…	坂戸…
214	212	210	206	204	202	200	198	196	194	192	190	188	186	184	182

大川おおかわ平兵衛英勝へいべえいひでかつ(一八〇二—一八七二)
享和元—明治四

横沼にある大川道場の旧景
(長屋門はいまはない)

神道無念流の剣術家、川越藩士。享和元年、熊谷市上之の渡辺家に生まれ、幼少の頃、小鮒家の養子となって栄治郎と称していた。

その頃の県北地方には、戸賀崎熊太郎くまごらを頂点とした神道無念流が栄えており、その流れをくむ秋山要助が箱田村（熊谷市）に道場を構えていたので、体格、体力ともに非凡なものを持っていた栄治郎は、すすんでその門下生もんかせいとなった。神道無念流のなかでも異色の剣士として知られる秋山の厳しい稽古に耐え、二〇歳で免許皆伝めんぎきいでんを得て、二二歳のとき師の仲人で横沼村の大川与佐衛門の婿養子となり、名を大川平兵衛英勝と改めた。後に道場を横沼と川越の通町に構えた。

平兵衛の剣は実戦を想定した厳しいもので、したがって胴をねらうことはせず、もっぱら面と小手を打ち、小手は腕の付け根まで深くねらったという。

師の秋山要助は各地を歴遊れきゆうしていたので、秋山門下の人々の多くは後に、平兵衛の門弟

なり道場は栄えた。

その実力が川越藩主松平直克に認められ士分となり、三石四人扶持を賜って、藩主外出のおりには、常に馬側に随行していたという。

天保七年（一八三五）には秩父郡両神村にある甲源一刀流剣五世逸見太四郎長英との流派をかけての試合をしている。また、武州北端の手計村や血洗島村（深谷市）の豪農尾高家や渋澤家まで出稽古にでかけ、多くの剣士を育てた。



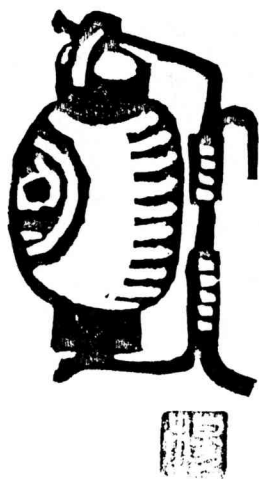
大川平兵衛の墓碑

明治四年（一八七二）九月長逝。七〇歳である。後年その門弟が相図って横沼の道場前に平兵衛翁の碑を建立した。この碑の篆額は前福井藩主松平春嶽公の筆であり、撰文は尾高惇忠によるものである。

（木村 公一）

家の使い走りなどをしながら独学で提琴を学
び、「金色夜しゃ」「ジンジロゲ」「パイノパイノ
パイ」などのはやり歌を村にひろめたいらしい。
こうして入西はおろか坂戸、勝呂、越生、毛
呂あたりまでバイオリンを流して歩いたが、
大宮のタカマチでも提琴を鳴らしながら楽譜
を売っている進さんを見た人も多いというか
ら、村どころか、県内各地の縁日には欠かさ
ことのできない人気者だったのだろう。いず
れにしても村に洋楽を入れた先覚者である。
昭和九年一月二八日、四十歳の若さで没した。

(田中 一郎)



晩年の大川平三郎肖像

32

大川 おおかわ

平三郎 へいざぶろう

(一八六〇) — (一九三六)
万延元 — 昭和一一

製紙王といわれた大実業家。万延元年（一八六〇）一〇月三芳野の横沼村で生まれた。

祖父は神道無念流の剣術家として名高い大川平兵衛（五十六）であり、父は修三といい剣道場の師範代を勤め、母は武蔵の北端、手計村の豪農尾高惇忠の妹みち子である。

祖父平兵衛は川越藩松平侯の剣術師範を勤めていた関係で、大川家も横沼・川越・前橋へと移住し、その後、松山の陣屋（五十八）で剣道を教授した。平三郎は幼年より祖父、父にならって剣術の修業を重ね、また学門にも身を置き文武両道に努めた。

松山在住のとき明治を迎え武士の時代は終わり、祖父平兵衛は他界し、大川家の財産は僅少（五十九）となり、衣食にも事欠いた。母みち子は実家の尾高家へ再三借金に行き、当座をしのぐありさまであったという。貧困の少年時代を過ごした平三郎は、薄暗いあんどんの下で夜半まで子どもたちのげたの鼻緒（六十）をつくっている母の姿に思わず感涙（六十一）を流し、早く一人前

になって母に楽をさせたいとの一念で学問に励んだという。

一三歳のとき、松山の油屋主人深沢嘉兵衛の援助を受けて、叔父渋沢栄一をたよって上京し、渋沢家の書生となる。本郷の壬申義塾で学び、さらに大学南校（帝国大学の前身）に進み、ドイツ語、英語を修得した。一六歳のとき、渋沢が社長をしている抄紙会社（後の王子製紙会社）に入社し、機械、製図の技術を独学で覚え、会社に大きな利益をもたらした。二〇歳のときには製紙法研究のため単独で米国へ留学、帰朝後は材料や工程などの改良に努め、実績をあげ専務取締役となる。また、浅野総一郎と組んで浅野セメントを興すことに成功し、名実共に実業家となった。時に二二才の若さである。以後四日市製紙、台湾紙業、日本鋼管、大島製鋼、富士製紙、樺太工業、日劇、東洋汽船、日本航空輸送、武州銀行、西武鉄道等八一社の社長、取締役、顧問に就任したのであった。

郷党の念厚く、三芳野小学校建設や越辺川の堤防工事には私財を投げ出し、郷土のために尽くした。大正一四年には大川育英会を組織し、千余名の卒業者を世に出したのである。昭和三年四月貴族院議員となり、勲三等に叙せられ、同一年（一九三六）二月三〇日都内の病院で波乱万丈の生涯を閉じた。享年七六歳。生前根津嘉一郎・浅野総一郎等の財界人有志によって、『大川平三郎君伝』が刊行されている。

（大川 四郎）



平三郎の尽力で完成した大川堤と記念碑



平三郎帰郷に際して地元歓迎会記念写真
（前列中央が平三郎その右が花井）